

『鯉』をどう教えるか

裴 崢

目次：

- 1 『鯉』の構造
- 2 『鯉』の作品分析
- 3 『鯉』の指導

1 『鯉』の構造

井伏鱒二の『鯉』という作品は1行あきによって、自然に4つの形式段落に分けられている。この4つの形式段落を、4つの場面として考える。場面とともに鯉のすみかが移っていく。その展開に従って小見出しを設ける。『鯉』の構造を次のように示して置こう。()内は場面を区切る本文の表現だ。

- 場面1 友人から貰った鯉——瓢箪池」から「泉水」（冒頭から「……姿を見せなかった。」）
- 1) 鯉との出会い（冒頭から「……語りあったりした。」）
 - 2) 鯉を瓢箪池へ（「下宿の中庭に……姿を見せなかった。」）
 - 3) 鯉との再会（「その年の冬……安息な呼吸をしてみた。」）
 - 4) 「泉水」へ（「私は相談するため……池の中に深くはいった。」）
- 場面2 「泉水」との別れ（「それから六年目の初夏……食べてしまったわけである。」）
- 場面3 「プール」に泳ぐ鯉（「私は鯉を……降りてきた。」）
- 場面4 「私」の白色の鯉（「冷たい季節が来て……私はすっかり満足した。」）

2 『鯉』の作品分析

前節で示した『鯉』の構造を踏まえて、場面ごとに『鯉』を分析しよう。

場面 1

すでに数年前から私は一ぴきの鯉になやまされて来た。学生時代に友人青木南八（先年死去）が彼の満腔の厚意から私にこれをくれたものであるが、（中略）鯉は其の当時一尺の長さで真白い色をしてゐた。

私が下宿の窓の欄干へハンカチを乾してゐる時、青木南八はニウムの鍋の中に真白い一ぴきの大きな鯉を入れて、其の上に藻を一ぱい覆ったのを私に進物とした。私は、彼の厚意を謝して今後決して白色の鯉を殺しはしないことを誓った。

『鯉』は「私」の回想によって終始する。冒頭部分から情景描写と「私」の心理的説明を通して、鯉をめぐる「私」と友人に関する基本的な情報を読み手に提供している。しかし、情景描写と「私」の心理説明はマッチしていない部分があるため、提示された情報はそのまま呑み込めない。ここで芥川竜之介の『蜜柑』¹⁾に書かれた冒頭部分を思い出し、両者の表現効果を比較したい。

ある曇った冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電灯のついた客車の中には、珍しく私のほかに一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、ただ、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空

1) 芥川竜之介『蜜柑』（「芥川竜之介全集」、筑摩書房）、1986年。

のようなどんよりした影を落としていた。

両者とも情景の細部が克明に写実されている。しかし、『蜜柑』では、「曇った冬の日暮れ」、「見送りの人影さえ跡を絶つた」うす暗いプラットフォーム、「檻に入れられ」、「悲しそうに、吠え立てていた」ただ一匹の小犬などのリアルな情景描写のうえに、「疲労と倦怠」につきまともわれて、「ぼんやり発車の笛を待っていた」「私」の心理的説明が加わると、情景と登場人物の内面世界はぴったり一致し、それがそのまま読み手に伝わり、読み手に強いイメージを与えると同時に、自ずから「私」との共鳴を引き起こす。

しかし『鯉』では、「私」が鯉と出会った時の状況、鯉の大きさ、色、入れ物などが綿密に書かれていながら、「私」と友人の心情についての表現は、「満腔の厚意」という抽象的な説明や、「進物」、「殺さない」といった誇張になっている。画面に映る状況と登場人物の心の動きとの間には、かなりの空間が感じられる。『蜜柑』のように隙間なく照らし合っているのではなく、読み手に疑問を感じさせるような空白が存在しているのだ。そのため、読み手はすんなりと作品の世界に入れないが、作品と距離を保ちつつも、文章を読み進んでいく。空白は読み手の想像にまかせられている。

『鯉』は『蜜柑』のように、すぐ読み手を共感させることはないが、それだけ読み手に想像の余地を与えるように描かれているといえる。読み手の創造力を強く刺激し、作品の世界を読み手に思い描かせることに成功している。

「私」は鯉を一旦下宿の瓢箪池に放ったが、理想的な場所ではないので、「不安」に思う。友人への誓いを果たすだけではなく、もし鯉が死んだら、と鯉そのものへの愛情が生じたためでもあろう。「私」はまもなく素人下宿へ移ったとき、「網を持ってゐなかつたので」、鯉を連れていくことを諦めた。網がないなら、買うなり借りるなりすればいいのに、なにも鯉を連れていけない理由にはならない。しかし、それを大まじめで言い立てるところに可笑しさがある。

「彼岸が過ぎて漸く魚釣ができればじめてから」、「私」は瓢箪池へ鯉を釣りに行った。鯉は容易に釣り上げられない。鯉はまだ生きているか、どうなって

いるか、「私」は苛々していた。以前の下宿の主人はいつでも「私」に彼の瓢箪池から魚を釣らせてくれるのだろうか。それも気掛かりだ。「漸く八日目」に、「目的の鯉」を釣り上げた。

前後2つの「漸く」は鯉に対する「私」の懸念を示し、「目的」という言葉には、鯉が魚釣りの目的物になっていることも理解できるし、贈りものを大事にする約束を守る努力の結果として、理解することもできる。目的物を「漸く」手に入れた安堵と、これからも約束を守るために、努力していかなければならないという圧迫感——この二つの感情が、「目的」という一語によって、「内包しうる」「語法」²⁾が使われている。

鯉を粗末にしたことを反省するかのように、「私」は「注意深く」鯉の寄生虫を除いた。友人の「満腔の厚意」を象徴する鯉というより、生き物としての鯉に対する「私」の一種の愛着を感じさせられる。素人下宿には鯉を飼う場所がない。困った「私」は、「寧ろ」「こいつを殺してしまっやろうか」とまで思った。

「寧ろ」は、2つの事柄のうち、あれよりもこれを選ぶ、またこちらの方がよりよいという比較・選択の気持ちを表す語である。「……てやる」は、「一発殴ってやる」、「一寸計算を誤魔化してやる」などと使うように、一般には動作が他に及ぶことを示す語である。その外に、相手のためにしてあげる、という場合もある。ここの例としては、特に「相手のために……」の意味として使われていると思う。

鯉を洗面器の中に閉じ込めたり、あるいは瓢箪池に入れて虫に喰われたりするより、殺した方が鯉のためだというのではないか。鯉に対する「私」の気持ちがやさしいからこそ、乱暴な言葉が使えた。短い2行によって、「私」の悩んだ様子が書き込まれている。しかし、「私」の荒々しい思いを秘めた仕業にも鯉はいつも穏やかな態度で応えた。鯉の安息な表情を見て、「私」は殺

2) ウィリアム・エンプソン『曖昧の七つの型』（岩崎宗治訳，研究社，1985年），35ページ。

すことを思い止まった。

幸い友人の承諾を得て、「私」は鯉を彼の愛人が所有する広い泉水に預けることになった。鯉をその泉水に入れていながら、「私」は鯉を所有する権利を主張した。

友人から貰った鯉を約束通りに、大事にする「私」の気持ちを示しているとも理解できるが、「必ず」というほどの「力説」には、鯉を支配する権利を失いたくない、「私」の願望を表す言葉としても理解できる。

所有権をめぐる争いがありもしないのに、それを力んで主張したところは、おもしろい。さらに「所有権」を強調することは、決して相手に対する「追従」の意味として受け取られない筈だが、青木の顔色が「疎ましく」なったのは、青木に「対しての追従だと思っただらしい」と理由づけられている。

実際、「寧ろ……追従だ」と書かれているように、「私のこの言葉」そのものは、友人の機嫌を取るというより、鯉を自由に所有したいという意味だけなのだ。「私」の主張に対して、友人の受け止め方はズレているように描かれている。

「矛盾やいくつかの陳述によって、結局なになんか一つ述べていない」³⁾が、にもかかわらず、この複雑な内容を超えて、「私」と友人との打ち解けた友情、鯉に対する「私」の執着心を覗くことができる。このくだりに隠れている意味は以下のようにも解釈できよう。鯉を飼うのが面倒臭いから、厄介払いのため、青木の愛人の泉水に預けるのではない。入れる場所がないので、入れて貰う。鯉のために入れてもらうのだ。鯉を大切にすることは変わっていない。これは友人に対して誓った約束を守るというより、鯉に対する「私」の愛情、と考えられる。

殺さない約束から所有権の主張に変わっているのは「ずらし」である、と亀井秀雄は指摘している。「ずらし」は本来の意味からちょっと滑り動かして、

3) ウィリアム・エンブソン『曖昧の七つの型』(岩崎宗治訳, 研究社, 1985年), 327ページ。

あるいは知っていて知らぬふりで表現することだ。このようにすると、直接表現するより、霧がかかっているように、意味がぼやけてくる。なぜはっきりさせる表現の仕方があるのに、わざとはっきりさせないのか。分かり切った透き通ったものは、場合によって、読み手にとっては意味がなくなり、つまらなく思う。霧がかかったような描写は、神秘的な感じを与え、意味がありそうに思わせる。

作品がその意味を直接指摘するより、読み手の想像を刺激するような遠回しの表現は、深みと重みを与えてくれる。直接には「私」が鯉が好きだと書いていないのだが、鯉に対する「私」の愛着をきちんと表現している。

一方、この食い違った表現によって、「私」と友人及び友人の愛人との関係も奇妙に揺れてくる。鯉を泉水に放ったことで、「私」には友人の愛人との繋がりができる。そこで「私」は鯉の所有権を主張した。青木は「私」の気持ちをうさんくさく思い、「私」も青木が抱いた疎ましさを思いに敏感に気付いたが、疎ましさには直接反応せずに「ずらし」た。この「ずらし」は一種のユーモアをも生み出している。

行をあらためて、「鯉は私の洗面器の水と共に池の中に深く入った。」と書かれて、場面1を閉じる。「洗面器の水」をわざわざ「私」のだと限定したのは、「私」が瓢箪池から鯉を釣り上げ、鯉の虫を除いて、「洗面器に冷水を充たして其の中に鯉を入れた」などを書いたように、「私」の鯉に対する手厚い世話を含めて、「魚の所有権」は「私」にある、と力説した「私」を裏付ける叙述だ。

場面2

6年後、友人が亡くなった。友人の死に関して、彼の母親の涙、愛人の靴が取り上げられる。その日「大小二十四個の花をつけたシャボテンの鉢を」持っていった「私」の行動については、細やかに語っているが、「私」の気持ち自体については、触れていない。「一刻も早く……白色の鯉を持って帰りたいと思った」のも、友人が鯉のことについて、一度だけ「疎ましい顔色をし

た」からだ、と書かれている。情景描写の細やかさと心理描写の素っ気なさが冒頭と同じ食い違ひを見せている。情景は映像できちんと抑えているのに、「私」の心の動きははっきりと書かれていない。このため、読み手はここでも「私」に同化し切れず、第三者、観客の席に坐ったまま、『鯉』の世界を眺めることになる。

このような表現の仕方は、小説の神様と称される志賀直哉の作品にも見られる。『母の死と新しい母』⁴⁾では、主人公「私」が新しい母と二人だけで初めて口をきいた際の情景と気持ちが、次のように描かれている。

翌朝私が起きた時には母はもう何か一寸した用をしてゐた。私は縁側の簀子で顔を洗ったが、毎時やるやうに手で涙がなんとなくかめなかった。

顔を洗ふと直ぐハンカチを出して母を探した。母は茶の間の次の薄暗い部屋で用をしてゐた。私は何か口籠りながらそれを渡した。

「ありがとう」かういって美しい母は親しげに私の顔を覗き込んだ。二人だけで口をきいたのはこれが初めてであった。

渡すと私は縁側を片足で二度づつ跳ぶ馳け方をして書生部屋に來た。書生部屋に別に用があったのでもなかった。

一連の細部の描写につづいて、「毎時やるように手で涙が何となくかめなかった」と、最後に「書生部屋に別に用があったのでもなかったが」と説明されている。唐突そうに見えるが、「私」の落ち着いた気持ちと言葉に出せない嬉しさが十分描き出されている。ここでは「私は嬉しくてたまらなかった」などと直接書いたら、情景描写とはマッチするが、行間の深い味わいがすっかりなくなってしまう。

『鯉』では、いわば、親友を失った悲しみを真正面から描かず、その周辺を淡々と述べたことが、友人に対して、なにもできなかった「私」の悔やみを

4) 志賀直哉『母の死と新しい母』（「志賀直哉集」、現代日本文学大系 34、筑摩書房、1968年）、202ページ。

深く感じさせる。

友人の母親や友人の愛人の放心状態とくらべ、シャポテンの鉢を持っていった「私」は、余りにも場違いだ、と悔やみ、友人の家に入ることができなかった、と理解できる。「大小二十四個の花をつけた」珍しいシャポテンの華やかさと対照することによって、言葉で表し切れない「私」の胸中の空しさが伝わってくる。

「少しも埒があかなかった」青木の母親の涙も、赤の他人に向かって流れる筈がない。息子の親友である「私」だったので、激しく流れた。柩の上のシャポテンの鉢は、青木の母親がそれを息子の角帽の横に並べたのだ、と想像が付き、「私」と友人の繋がりが窺われる。その後「……鯉を持って帰りたいと思った」と書かれている。

ここまでを辿って、これは「私」の友人の唯一の形見としての鯉を取り戻したい素直な気持ちとして、理解しやすい。また、友人を通して付き合っていた友人の愛人も、おそらく友人の死によって、もう赤の他人になってしまうはずなので、友人の形見としての鯉をこれ以上預けるわけにはいかず、「一刻も早く」釣り戻すことによって、一人占めにしたいのではないかと考えてもおかしくはない。だが、これに続いて、すぐ、

青木南八が私に対して疎ましい顔色をしたのは、かつて鯉のことについて一度だけであったからである。

と付け加えられている。すると、「持って帰りたいと思った」のは、鯉に対しての「所有権」を実現しようとするためではないか、とも思われてくる。鯉を取り戻したい気持ちはぼやかされてしまう。

「可憐な女靴」の描写を追求すると、愛人との関係が纏わってくるように感じられる。靴そのものは感覚、感情を持つはずはない。人によってはその靴から靴の持ち主に対する感覚、感情を連想することができる。たった一つの形容詞と一つの名詞からなっている「可憐な女靴」という表現は、なにも明らかにしていない。しかし、読み手は「私」がその靴の持ち主に対して好意を持っていることを推測することができる。

「可憐な女靴」を見て、「私」は玄関に入らなかった。「私」は青木の「一度だけ」の「疎ましい」顔色を案じて、「一刻も早く」泉水から鯉を持って帰りたいと思った。その理由も推し量ることができよう。

鯉は「私」と青木とのあかしであるため、人に任すわけにはいかない。そして鯉を通して、愛人との関わりを継続させるのは「私」の気持ちが許さない。鯉と彼女を引き離すため、「私」は鯉を取りに行かざるを得なかった。

(青木の靈魂が私を誤解してはいけないので、ここに手紙の全文を複写する)

この言葉は二回繰り返されている。読み手だけを意識して、ストレートに手紙を書けば、「誤解」はなにも起こる筈がない。青木に気を使う心情を読み手に披露しながら、あくまでも読み手に面と向かって、青木と「私」との話を進めるように書かれると、かえって「誤解」を引き起こしがちだ。

また、亡くなった「友人の靈魂」に対して配慮する必要がむしろないと思われることを、大げさに小心者ふうに対応する行動を取るところに落差がある。この落差によって、ユーモアが紙面に溢れるようになる。

「私」の手紙はいやに勿体ぶった漢文調を使い、それを読むと「私」と友人の愛人との堅苦しい関係を感じる。だが、特にどうということもない用件を大仰な表現で書くと、かえって滑稽に思われる。普通ならば、「鯉を釣る」と書くところが、「池畔に釣り糸を垂れる」と書かれている。「私」のユーモラスで飄然とした性格が現れてくる。

彼女の返事には複雑なものはいっさい書かれていない。だが「御遠慮なく魚だけをお釣りにくださいまし」というところは気掛かりだ。鯉を釣るので、普通はどうぞご自由に鯉を持って行ってくださいという。しかし「だけ」という言葉を使うと、余計なことをしないでくださいとも思われ、のちに枇杷を食べる情景を引き出す伏線になろう。

漢文調で書かれた手紙の堅いイメージとは反対に、鯉を釣り戻すくだけは

のびのびとした雰囲気を感じられる。「私」は人の目にはばかることは別にないの、「忍び込んだ」とか、わざと悶着が起こりそうであるかのように描いている。「若しもの証拠に手紙の返事を持って来ればよかったのである」と書いているものの、むしろ必要以上に人の誤解を避けようとする装いの表現に思える。

『鯉』の中で、友人の愛人が登場するのは3箇所しかない。1回目は、鯉を泉水に入れる際、彼女は間接に友人と「私」の会話にのぼった。2回目は、すでに友人がなくなって、「私」は死者の家の土間に「急ぎ足に脱いであった」友人の愛人の「可憐な女靴」を見たが、「可憐な女靴」の持ち主の顔は依然として出ていなかった。

3回目は、前の2回よりかなり具体的なイメージとして現れたが、それにしても単なる手紙——友人の死去した後、一刻も早く預けてあった白色の鯉を泉水から釣り上げ、持って帰りたいという「私」の常識はずれの要求を許した返信——の文面を通してであり、一向に姿を見せていなかった。

友人の愛人はどんな容姿をしているか、何という名前なのか、どのような性格を持っているか、『鯉』には何も書かれていない。にもかかわらず、その「可憐な女靴」、手紙の達筆な文面、または青木がなくなってすぐ鯉を釣り戻したい「私」の勝手な願いに対する許しなどの少ない描写を拾い合わせれば、彼女は大変可憐で優しく魅力的な少女だと想像がつく。彼女については、長谷川泉がこう述べている。

彼女は、『鯉』の中で、ほんの僅かな、しかもほとんど間接的な記述を与えられている少女に過ぎないが、なんと魅力的な少女であることか。

私はこの無名の少女をたたえる⁵⁾。

この「可憐」な少女が友人と私との間に存在していたからこそ、友人と「私」との関わりは、ひとしお生き生きと浮き彫りにされ、『鯉』という物語に膨ら

5) 長谷川泉「鯉——近代名作鑑賞(10)——」、『国文学解釈と鑑賞』(第23巻10号、至文堂、1958年10月)、158ページ。

みを持たせることができたといえよう。あんなに「可憐」な恋人がいたのに、若いうちになくなった友人が一層惜しく思われるとともに、青木南八自身の魅力が輝いてくる。

さらに「私」にとっても魅力のある若い彼女が友人の愛人として、友人と「私」の間に立つことによって、「私」の立場と心情が複雑に感じとられ、「私」の悩みはより深刻に浮かんでくる。

場面 3

「私」は早稲田大学のプールに鯉を放った。その夏、「私」は毎日の午後、プールで泳いだ学生達の水泳ぶりを見に行った。その「見物」は、すでに「失職していた」自分には「最も適切なもの」だと思う。

「適切」はぴったり適合する様子を意味するが、ここではむしろ同一語の自嘲的な響きを利用している。これによって、「私」の暇を持て余している、また孤独になっているやり切れない心境がよく分かる。エンプソンの述べたように、1つの単語の「2つの意味」、曖昧の2つの価値がコントラストによって限定された2つの対立する意味をなし、そのために全体的効果として、登場人物の「心の中の基本的分裂を示して」⁶⁾くる。「適切」と言いながら、実際は不適切だというのだ。

ある夜明けに、朝のすがすがしい空気を吸うため、「私」はまたプールに足を運んだ。「私」の孤独について、

誰しも、自分はひどく孤独であると考へたり働かなければいけないと思ったり、或はふところ手をして永いあひだ立ち止まったりするものである。

と、まるで他人のことを述べているようだ。実際友を失い、失職もしていた「私」の淋しさと悩みは深刻だが、他人の目で見えた角度で書くと、その深刻さ

6) ウィリアム・エンプソン『曖昧の七つの型』(岩崎宗治訳, 研究社, 1985年), 357ページ。

が薄れていく。逆にここで書いているように、「私」は他人の立場によって、他人の口を借りて、自分の境遇を言い出すと、効果をより高めることができる。

一方、すべての人の一般的な習慣として書いているわけだが、実は「誰しも」そうするとは限らない。それをいかにももったいぶって、こう書かれると、思わず微笑みを誘う。

「鯉が！」「私」は突然「プールの水面近くを泳ぎまわっている」「私の白色の鯉」を「発見した」。静かに流れる作品の中であって、「鯉が！」という「私」の叫び声が、感情の高まりと共に、場面を鮮やかに切り換える。それまでの暗くて、淋しくて、うつつした心境を劇的に突き破った。「鯉が！」という短い一語が、強い響きで、読み手に迫ってくる。

「私」の鯉は、学生に代わって、燕に代わって、プールの主人公になる。「私」の鯉は、「巧みな水泳ぶり」にとどまることなく、与えられただけの環境を「巧みにひろびろと扱ひわけて」、まるで「王者」のような存在であった。

(前略)私の所有にかかる鯉をどんなに偉く見せたかもしれなかったのだ。

私はこのすばらしい光景に感動のあまり涙を流しながら、音のしないやうに注意して跳込み台から降りて来た。

ここでは登場人物はもはや「私」だけだ。「私」と鯉だけの世界になる。振り返れば、鯉が初めて登場した時では、「一尺の長さで真白い色をしてゐた」。瓢箪形の池から釣り上げた時、「鯉は白色のまま少しも痩せていなかった」。「私」は無花果の葉の下の鯉を殺そうかと思つて、幾度もつまみあげてみたが、「鯉はその度毎に口を開閉させて安息な呼吸をしてゐた」。「鯉は私の洗面器の水と共に」友人の愛人の泉水の中に「深く入った」。そして早稲田大学のプールにおいて、鯉は「ここにあっては恰も王者の如く泳ぎまわつてゐたのである」。

鯉についての描写は、静的なイメージであったが、ここでは一転して大変ダイナミックな表現に変わる。こういう鯉の描写から、孤独になった「私」

の切ない気持ちとが対照され、自然に「涙を流し」たという「私」の内面的世界が、初めて生の形で表現される。読み手も「私」の素晴らしい感動に共鳴する。松本鶴雄が述べている通りだ。

鯉の雄姿には現在のうつつした自我から自己を解き放ちたいという希いがこめられているだけに、その小説のクライマックスは美しく、うら悲しい甘美な光景が読む者の心を射るの⁷⁾である。

鯉は、プールの中でどんどん大きくなり、「私」のイメージそのものに昇華していく。「枇杷の実を無断で食べてしまった」「私」なのに、鯉の逞しく泳ぐ光景を見て、感動の「涙を流しながら」、静かに「跳込み台から降りて来た」のだ。

一方、もう一度「所有権」を力説する場面が思い出される。友人の「厚意を謝して」、決して「殺しはしない」と約束した鯉は、かつて飼う場所がないので、友人の愛人の泉水に入れたことがあった。その時、「私」は鯉を所有する権利を力んで主張した。

友人が亡くなることによって、鯉を殺さない約束は事実上解消されると同時に、鯉を友人の愛人の泉水から釣りだし、早稲田大学のプールに放つことに伴って、鯉は「私」と一定の距離を保つことができた。

にもかかわらず、「私の鯉」、「私の所有にかかる鯉」を繰り返す。友情としての鯉というより、「私」の思い、気持ちを託す精神的な象徴として、浮き彫りにされてくる。そこに友人への思いももちろん寄せられている。しかし、それだけには限らないだろう。プールでは学生達の元気で、朗らかな姿が描写されながら、鯉が現れなかった。それから鯉が登場した。鯉が見つかった「私」の嬉しさ、新鮮さを、繰り返した「私の」、「私の……」という表現で強く示している。「私」は鯉を通じて様々に悩んで、苦しんで、心配もしてきた。そこへ自分の様々な気持ちを漲らせて生きている鯉の元気な姿を確認するこ

7) 松本鶴雄『井伏鱒二論』（冬樹社、1978年）、58ページ。

とができた。自分の思いが成就され、思わず胸が打たれ、落涙したのではないか。

プールのくぐり方は『鯉』のやま場のように見える。友を失い、失職した悲しみも、鯉が王者のように自由自在に泳ぐのを見て、慰められる。ここで『鯉』の幕を閉じてもおかしくはない。美しい結末とさえ見えるのだ。

書き手は『鯉』を発表して数十年たってから、一時はこの場面で終わり、最後の部分を「きることにしよう」と発言したことがある。なぜ結局切らずに済んだかはこの論文の取り上げる問題ではないが、ここで終わってしまうと、作品の味わいはかなり異なってしまう。

『鯉』は友人への思いが鯉への思いになって、その「一ぴきの鯉になやまされてきた」人間の複雑な悲しさを物語る話だ。冒頭ですでにイメージ付けられているように、『鯉』の底辺に流れているのは、感動ではなく、感傷や哀愁なのだ。場面は感動した夏の早朝から、寒い冬に移っていく。

場面 4

冬になると、氷が張り、鯉の姿は見えなくなった。にもかかわらず、「私」は、「毎朝プールのほとりへ来てみることは」やめなかった。鯉には直接めぐりあえないが、プールに来ることだけでも、「私」の気持ちは納得しただろう。夏から半年立っても、「私」は鯉のことを忘れていない。

「私」は氷の上に「小石を投げて遊んだ」。大人の仕業らしくないが、「私」の淋しい気持ちを「氷の上を滑って」「たてた」小石の「冷たい音」で書き表し、作品は清冽な感じに満ちあふれてくる。

氷の上に薄雪が降ったある朝、「私は長い竹竿を拾って来て、氷の面に絵を描いてみた。長さ三間以上もあらうといふ魚の絵であつた。」「当時一尺の長さ」から氷上の「三間以上も」大きく成長した鯉の絵には、「すでに数年前から」という多くの時間的な経過を示すと同時に、今まで鯉に込めてきた「私」の思いも強く現れている。「私の考へでは、これは私の白色の鯉であつた。」

『鯉』では、「白色」という言葉が頻繁に出ている。「一尺の長さでまっ白い

色をしていた」鯉、「白色のまま少しも痩せてはいなかった」鯉、「私の白色の鯉」などと9回も繰り返されている。「白い」は鯉の色である。同時に友人の「厚意を謝して今後決して白色の鯉を殺しはしない」という、友達同士の純粋な気持ちを込めた特定の鯉だ。白い鯉である以上、途中赤色や黒色などに変わる筈がない。なのに「白色のまま」と強調するのは、鯉は依然として、普通の鯉と違って、友人の厚意と「私」の謝意との間にしか成立できない「白色の鯉」だ、と物語っているのではないか。

氷の上に絵を描くこの時も、白色以外に、如何なる色も取り上げられていない。白一色は、まさに鯉の清らかな体、静かに降る雪、凍った水の冷たさを感じられる色だ。何回も出てくる「白色」に、氷の上に描かれる鯉の絵を重ね合わせて、「私」の心の状態も浮き出させる。「白色」を常に敏感に感じている「私」は、きっと淋しいに違いない。学生たちの「健康な肢体と朗らかな水泳の風景とをながめて」、しばしば「深い嘆息をもらした」「私」、「ひどく孤独で」あった「私」は、実に淋しげに見えてくるのだ。

このように繰り返されてくると、「白色」は如何にもしみじみとした淋しい感情的な色彩に思われてくる。「白色」をこのように重ねて使うことが、「私」の心象の表現として、鮮やかに浮かび上がる。

また「白色」は、「私」と青木の純粋な友情を表現している。失職してひとりぼっちになった「私」の心情をも表している。小林秀雄の語った「肉体的な生々しい心」と「一種の生理的哀愁」は、この「白色」という言葉によって、効果を強めたといえる。まさしく1つの言葉を用いながら、「同時に数個の効果をもつ」⁸⁾手法によって、こんな奥行き深い味わいを醸し出した。

絵ができ上がると、鯉の鼻先に「……………」何か書きつけたいと思ったがそれは止して、今度は鯉の後に多くの鮒や目高が遅れまいと纏ってゐるところを描き添へた。

8) ウィリアム・エンブソン『曖昧の七つの型』(岩崎宗治訳, 研究社, 1985年), 5ページ。

けれど鮒や目高達の如何に愚かで惨めに見えたことか！彼等は鰭がなかったり目や口のないものさへあった。私はすっかり満足した。

鯉の鼻先にもし文字を書きつけば、どんな文字で一番「私」の気持ちを表すことができるだろうか。「私」自身も思いつかないから、やむをえず「止した」のではないか。あるいは作品としてはわざと「私」の思いを「……………」という形で隠したのだろう。ここには「曖昧」の表現効果の外に、余白で急に流れのテンポを止めることによって、リズム効果をもたらしている。

大きな鯉と見すばらしい雑魚の絵を描いたことに「すっかり満足した」「私」の仕業は、子供じみた行為で、愚かしくも見えるし、気違いにも見える。ここを単なる1つの孤立した場面と考えるなら、そのようなおかしい笑いしか催されないだろう。鯉をめぐる展開された友人と「私」との屈折した関係を考慮に入れると、こういうユーモアを生み出す描写が、「私」の淋しい、悲しい気持ちのある深い形で浮かび上がらせる。織田正吉の言った「おかしさといっしょにさびしさが同居し」、「笑いと同居する人生の哀愁」⁹⁾なのだ。

「満足」という言葉は「望みがかなって不平のないこと」、「みちたりること」¹⁰⁾という2つの意味がある。中国語としてそれぞれ「滿意」と「満足」を訳すことができる。「滿意」より「満足」の方が作品の意味により近いと考える。

「私」の淋しい気持ちは鯉の絵を描くという1つの代償行為によって、満たされたが、すべてが解消されたわけではない。『鯉』の中国語訳は、ここでは「我感到非常滿意。」¹¹⁾と訳されている。そうすると「笑いと同居する人生の哀愁」の深い味が出なくなると思う。それよりは、「我感到很高的満足。」と訳した方がいいと思う。「すっかり」を「很高的」と訳したのは、量的な意味を

9) 織田正吉『笑いとユーモア』（ちくま文庫、1990年）、239ページ。

10) 久松潜一・佐藤謙三『角川 国語辞典』新版（1974年）、977ページ。

11) 井伏鱒二原作「鯉」、森紀子・趙平・邢衛訳注、『日語学習と研究』（『日本語学習と研究』、北京對外貿易大学出版社、1982年3期）、68ページ。

表す「非常」より、質をより表していると考えているからだ。

プールの場面で「私」は、鯉の泳ぐ雄姿によって、自分の思いを成就することができた。しかし、見て感じただけでは自分の達成感を表現することにはならない。「私の鯉」を力強く表現したかった。

大きな鯉を描いたことで、鯉に抱いてきた「私」の友人への深い思いは、「私」の心の中にきちんとしっかり収まった。立派で大きな鯉の絵に、夏のプールで成就された感動を氷の上でもう一度味わうことができた。友を失った淋しい思いを埋めることはできなくても、鯉を描かずにはいられなかった。「私」の思いは深くて切なかった。

「私」の孤独感、淋しい空白は、踊り上がる大きな鯉のイメージで、この時、「すっかり」満たされたのだ。悲しくて、美しい気持ちである。

このように、『鯉』は一見やさしい語句や表現から構成されているが、その平易な語句の後ろに隠されている部分がある。如何にその部分を見出すかが、『鯉』を理解するための鍵になる。「噛みしめれば深い味わいの出てくる」¹²⁾(長谷川泉) 素晴らしい作品ではないか。

3 『鯉』の指導

前節の作品分析を踏まえて、表現課題方式による『鯉』の指導案を次のように考える。対象は上級日本語の課程にある中国人学習者とする。

表現課題方式とは、「場面」と作品全体の構造を一番はっきりと示している表現に注目し、なぜそうした表現になっているのか、なぜそうした表現が必要なのか、またこの表現が二重、三重の意味を含んでいるのではないかと、といった課題を設けて、授業で討論し、追究していく方式だ。ここでいう場面とは、作品展開の質的な転換であり、ここでしか区切れない一つのまとま

12) 長谷川泉「鯉——近代名作鑑賞(9)——」、『解釈と鑑賞』(第23巻9号、至文堂、1958年9月)、141ページ。

りなのだ。

必要となる課題は、①場面の内部にある、部分の理解と関わる表現の巧みさ・膨らみに注目する部分課題、②各場面全体の理解と関わる場面課題、③作品全体の核となる構造課題——ととらえ、3つのレベルに分けて考える。

課題設定の方式には、1. 作品中の表現を他の表現と入れ替えたものや抜き取ったものを原文と比較して、もとの表現が意味するものを理解する「想像的破壊」の課題、2. 作品中の「曖昧」表現を一義的な表現や同義に思えそうな他の形に置き替えたものを原文と比較して、もとの表現の持つ膨らみと広がりを読み取る「『曖昧』の読み取り」の課題、3. 多くの描写から、同質の描写を対照的に整理し、表現の意味と効果を明らかにする「描写の類型」の課題、4. 同じような題材やストーリーなどの作品、描写手法を比較して読む「較べ読み」の課題がある。

作品をこのように理解させるには、指導する全体の流れを次のようにしたい。

- | | |
|--------------|------------------------|
| I 導入 | 教師が作家井伏鱒二について簡単な紹介をする。 |
| 通読 | 作品全体を通し読みする。 |
| II 第一の段階の読み | 表現の読み取り。 |
| III 第二の段階の読み | 作品の読み取り。 |
- では、II、IIIについて示す。

II 第一の段階の読み

部分課題1 「鯉はその度毎に口を開閉させて安息な呼吸をしてみた。」
 (p2, 14行-15行) とあります。
 「口を開閉して」と比較して、どう違うかを述べてください。

答 「口を開閉して」は単なる自然の現象だ。「口を開閉させて」は鯉

の意志を感じさせる。「私」にはこの鯉をただ自然物と見ているのではなく、心を持っている存在だと思っている効果がある。

ねらい 鯉を特別な存在として認識する。

場面課題1 「鯉は私の洗面器の水と共に池の中に深く入った。」(p 3, 7行) という表現を、次のように書き換えたとします。

「鯉は 池の中に深く入った。」
元の文はどんな効果を持っていると思いますか？

答 友人の愛人の広い泉水と比べて、「私の洗面器の水」はほんの僅かだ。それにしてもこれから鯉のすみかである泉水に、自分の持っていった水を加えると、「魚の所有権は必ず私の方にある」という力説を形として、さらに私と鯉との繋がりを強調する効果がある。

ねらい 表現のコントラストによる面白さに注目し、「所有権」を主張する「私」の心情と「疎ましい顔色をした」友人の気持ちを察する。

部分課題2 「私は一刻も早く彼の愛人の家の泉水から白色の鯉を持って帰りたいと思った。」(p 4, 4行-5行) とあります。その理由は何ですか？

答 「青木南八が私に対して疎ましい顔色をしたのは、嘗て鯉のことについて一度だけであったからである。」と書いているが、それは理由ではない。鯉を大切にするという友人との約束を果たすため、また友人の形見として鯉を取り戻したいのだ。

ねらい 結果と理由がずれている表現効果に注目する。

部分課題3 「(青木の靈魂が私を誤解してはいけないので、ここに手紙の全文を複写する)」(p 4, 7行-8行), 「(青木の靈魂が彼

の愛人を誤解してはいけないので、ここにその全文を記載する)」(p4, 14行~p5, 1行)とあります。

この二回ほど繰り返されている部分がないのとあるのとは比較してください。あると、どういう効果を持ちますか？

答 読み手だけを意識して、ストレートに手紙を書けば、なにも「誤解」を招く筈はない。わざと悶着が起りそうな不必要なほどの配慮を見せると、かえって「誤解」を引き起こしやすい効果になる。

ねらい 表現の面白さに注目し、「私」の複雑な立場と微妙な心の動きを読み取る。

場面課題2 「ところが鯉は夕暮れ近くなって釣ることができたので、私は随分多くの枇杷を無断で食べてしまったわけである。」
(p5, 11行-13行)とあります。「わけ」の表現効果を説明してください。

答 「わけ」は必然的にそうなったというニュアンスがある。この表現によって、枇杷を無断でたくさん食べてしまったことは「私」の責任ではなくなる効果を作り出すことができた。「私」は枇杷を食べることを止めればいいのに。なにも必然的にそうなったのではないのに。笑いを誘う見事な表現だ。

ねらい 友人を意識して、堅苦しく手紙を書いたり、「証拠」を持ってくるべきだと「私」が考えたりしていたほどの緊張感を解きほぐして、一種ののびやかな雰囲気を感じさせる。このくだりが果たしている役割に注意し、理解する。

部分課題4 「私は最早失職してみたので、この見物は私にとって最も適

切なものであった。」(p 6, 3行-4行)とあります。
文中の「適切」のニュアンスを説明してください。

答 「適切」はぴったり適合する様子を意味するが、ここではむしろ同一語の自嘲的な響きを利用している。「適切」と言いながら、実際は不適切だということである。

ねらい 表現の膨らみに注目し、「私」の「ひどく孤独である」ことを理解する。

部分課題5 「こんな場合には誰しも、自分はひどく孤独であると考へたり働かなければいけないと思ったり、或はふところ手をして永いあひだ立ち止ったりするものである。」(p 6, 13行-15行)とあります。
「こんな場合」の中味を述べてください。

答 友も職も失ってしまい、学生たちの元気で朗らかな姿に嘆くしかできない日々を過ごしている「私」の状況。

ねらい 表現の膨らみを読み取り、「私」の境遇を適切に理解する。

場面課題3 「私の所有にかかる鯉をどんなに偉く見せたかもしれなかったのだ。」(p 7, 6行-7行)という表現を、次のように書き換えたとします。

「
鯉をどんなに偉く見せたかもしれなかったのだ。」

元の文はどんな効果を持っていると思いますか？

答 鯉の「所有権」を力んで主張した場面をあらためて想起させられる。友人への思い、鯉を通じて様々に悩んで、苦しんで、心配も

してきた「私」の気持ちを浮き彫りにする。

ねらい 鯉を通して「私」と友人の友情を述べてきたこれまでの場面から、鯉は「私」の心情を託す精神的な象徴として「私」と関わっていく場面への転換に注意する。

部分課題6 「小石は軽く投げれば速やかに氷の上を滑って冷たい音をたてた。また力をいれて真下に投げつけると、これは氷の肌にささった。」(p7, 12行-14行)とあります。
このくだりの表現はどんなイメージと効果を持っていると思いますか？

答 「冷たい音」や「氷の肌」などの表現は、作品に清冽なイメージを与える。また大人の仕業らしくない行為だが、「私」の淋しい気持ちをよく表している。

ねらい 表現の美しさに注目する。

場面課題4 「長さ三間以上もあらうといふ魚の絵であって、私の考へでは、これは私の白色の鯉であった。」(p8, 1行-2行)とあります。
鯉についての「白色」という修飾語が作品中に何度も出ています。それらを抜き出した上、その表現効果を指摘してください。

答 「真白い色」、「白色」、「白色のまま」など、全部で9箇所。「白」は鯉の物理的な色だが、友情の純粹さを示唆するとともに、「私」の孤独さを匂わせるに相応しい色である。それを重ねて使うと、「私」と友人との友情を暗示し、「私」のなんともいえない淋しい心を表す効果をいっそう強めることができる。

ねらい 「私」の心象の表現として、イメージをくっきりと鮮やかに飾る「白色」という言葉の働きに注目する。

III 第二の段階の読み

〈構造の把握、全体の読み〉

構造課題 この物語のやま場は、鯉が広びろとしたプールの中を悠々と泳いでいる姿に感動する、というところなので、この物語はここで終わってもいい筈です。しかし、そのあとに氷の上に絵を描くという場面が続きます。

この場面がある場合（B）とない場合（A）とを両方考えて、その効果を指摘してください。

- 答 A 友人とかかわりのある鯉の泳ぐ雄姿に感動して終わると、失意・寂寥感を抱きながら、突如として湧き上がる「私」の感動と昂揚した気分が紙面に広がり、それまでの作品全篇を覆うペーソスを交えたユーモアの流れからはずれ、ハッピーエンドになる。
- B 感動を厳しい冬にまで持ち続け、代償行為に秘めた言い切れない哀愁が、作品の最後まで流れ、深い余韻を持つ結末になる。

『鯉』の理解を深めるために、作品に書かれている語句や構成を手掛かりとして、作品のイメージを読み手が自ら作り、膨らませていけるような指導案を作成した。今後、この指導案を生かして、授業を実践したい。